

危険が迫ってからでは遅い

高齢者の避難時間は限られており、施設職員の決断や避難行動を起こすまでがスローになれば被害に遭ってしまふ。目の前に危険が迫ってから回避行動を取っても遅い。

リーダーシップを取る職員が必要。防災訓練は型通りになりがちだが、誰がどの高齢者をサポートするのか頭の中で手順をイメージしておくことも重要になる。避難途中で遭難するリスクもあるが、避難しないで犠牲になるケースの方が多い。とにかく安全第一で逃げることだ。

また、災害時の事業継続計画（BCP）の策定は運営を途切れさせないために非常に大切で、介護サービ

スが受けられなくなってしまうたら、それがもとで災害関連死に至りかねない人も出る。

避難を介護ロボットに任せるわけにはいかない。高齢者を運び上げるような人がいないと逃げられない。災害も想定し、職員を増やすため賃金面でのインセンティブ（動機づけ）が必要になる。

住民には、介護施設や高齢者を地域で受け入れる意識が求められる。その気持ちがないと、施設がへき地や危険な場所に建てられるかもしれない。誰しも介護サービスの世話になる可能性が考えられ、住民にとって一番良い場所にあるべきだ。

そもそも低地など津波や豪雨に対し脆弱な場所に施設を設けるのは好ましくなく、安全な土地に移転すればいいが経済的な負担もかかる。行政には財政支援を求めたい。



東京女子大の広瀬弘忠名誉教授

ひろせ・ひろただ 1942年東京都出身。東京大文学部卒。災害リスク学が専門。防災、減災の在り方を研究する安全・安心研究センター（東京）の代表を務める。